

**2019年度 発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業  
(発達障害に関する通級による指導担当教員等専門性充実事業  
成果報告書 (I))**

実施機関名 (香川県教育委員会)

**1. 問題意識・提案背景**

高校における通級による指導の制度化に伴い、県内の高等学校において、小・中学校で障害に応じた指導を受けてきた生徒から高等学校で通級による指導を受けたいという要望が出てきている。今後、さらに高等学校における通級による指導のニーズは高まると考えられる。本事業1年目の研究では、高等学校をモデル校に指定して、通級による指導の実施に関わる運営や指導内容等の研究を行った。課題としては、特別支援教育コーディネーターや通級による指導担当教員が通級による指導の対象生徒と捉える生徒であっても、生徒に関わる他の教員は、通級による指導の必要性を感じておらず、通級による指導を進めることに対して消極的であった。その結果、生徒自身が日常生活における困難さを自分の課題として捉えられず問題意識を持っていないことで、通級による指導につながらないという現状があった。また、県内中学校と高等学校の連携においては、個別の教育支援計画と個別の指導計画は引き継いでいるものの、在籍学級担任と特別支援教育コーディネーターの情報共有にとどまっており、高等学校での対象生徒の実態に応じた支援内容を関係教員で検討する場の必要性が感じられた。

2年目は、1年目の課題を踏まえ、学校全体で取り組む特別支援教育を推進するため、通常の学級や通級による指導担当教員の専門性を高める研修や、中学校との支援情報の共有、校内支援体制作りなどの在り方を検討する。

**2. 目的・目標**

中学校及び高等学校モデル校での支援情報の共有の仕方や指導方法等に関する研究、通級による指導担当教員に対する研修体制構築についての研究を行い、その成果を県全体に普及することで、小・中・高等学校における通級による指導の充実を図ることを目的とする。モデル校においては、全教員が困難さのある生徒への理解を深め、個の実態に応じた支援内容や指導内容を設定できるようにすること、通級による指導担当教員等の専門性向上を図るとともに、高等学校の通級による指導担当教員に求められる専門性について明らかにすること、中学校からの支援内容を高等学校でも継続・更新できる支援体制を構築することを目標とする。そして、モデル校における授業公開や県内全域の通級指導教室(通級による指導のこと。)における実践集の作成・配布により、その成果を県全体に普及する。

**3. 主な成果**

**(1) 全教員が困難さのある生徒への理解を深め、実態に応じた指導内容等を設定すること**

- ア. 発達障害者支援センターから相談支援員を招いての講演や、大学教授が指導助言を行うケース会を実施し、様々な困難さのある生徒の課題や適切な対応への理解を深めることで、学年団の中で校内支援委員会が実施できるようになった。
- イ. 通常の学級におけるソーシャルスキルトレーニング(SST)の授業の実施により、徒が自己理解や他者理解の意識を持つようになった。
- ウ. 生徒や保護者に対して通級による指導の普及啓発を行うことで、通級による指導を受ける生徒が増加した。

(2) 通級による指導担当教員の専門性の向上に関すること

- ア. 専門指導員（通級による指導の専門性の高い指導員のこと）と共に「通級による指導」を実施することで、生徒の特性を多面的に捉えたり、個の実態に応じた学習内容を設定したりすることができるようになった。
- イ. 校内研修等で「通級による指導」についての理解啓発を行うことで、生徒理解が進み校内支援委員会で支援の内容を検討する生徒が増えた。

(3) 中学校における支援内容を高等学校でも継続・更新できる支援体制を構築すること

- ア. 保護者との懇談から得た情報の共有や支援の検討を校内支援委員会でを行い、通級による指導対象生徒の個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成をできるような体制を整備することができた。
- イ. 小豆島町特別支援教育コーディネーター・通級指導教室担当者連絡会において、特別な支援が必要な生徒についての情報交換を行うことで、生徒理解を深めることができた。

(4) モデル校における授業公開や県全体への成果の普及に関すること

- ア. 高等学校における特別支援教育研修会を開催し、授業参観や実践発表を行ったり、実践集、「高等学校における『通級による指導』についてのQ&A（教員向けリーフレット）」の作成・配布をしたりすることで高等学校における通級による指導の理解を進めることができた。



<通級指導実践集>



<高等学校における「通級による指導」についてのQ&A（教員向けリーフレット）>

(5) 通級指導専門性充実検討会議の設置状況

県教育委員会では、福祉関係者や労働関係者、教育関係者を外部指導者として委嘱し「通級指導専門性充実検討会議」を設置し、モデル校における通級による指導の指導方法や指導内容の検討や、県教育委員会が主催する研修体制等についての検討を行った。通級による指導に必要なスキルを洗い出し、専門性向上のための研修をモデル校や県主催の研修会において実施することで、生徒理解の深化や校内支援体制充実につながった。

ア. 通級指導専門性充実検討会議委員

No	所属・役職	備考
1	元小学校教員〔通級指導教室担当〕	専門指導員・特別支援教育士
2	元特別支援学校教員	専門指導員・特別支援教育士
3	香川大学・教授	外部指導者・言語聴覚士・特別支援教育士スパーパー（S V）・自閉症スペクトラム支援士

4	かがわ総合リハビリテーションセンター地域交流科・科長	外部指導者・作業療法士
5	障害者就業・生活支援センター「オリーブ」センター長	外部指導者
6	元小学校教員〔通級指導教室担当〕	外部指導者
7	特別支援学校・特別支援教育コーディネーター	外部指導者
8	特別支援学校・特別支援教育コーディネーター	外部指導者
9	小豆島町立小豆島中学校・教諭〔通級指導教室担当〕	モデル地域拠点校
10	小豆島中央高等学校・教諭〔通級による指導担当教員〕	モデル地域拠点校
11	香川県教育委員会事務局特別支援教育課主任指導主事	事務局

## イ. 協議内容

第1回（令和元年5月17日）	①検討会議構成委員の確認 ②令和元年度事業の概要 ③その他
第2回（令和元年10月17日）	①通級による指導担当教員等への研修体制 ②モデル地域指定校における現状 ③その他
第3回（令和2年1月28日）	①通級による指導担当教員等への研修体制について ②モデル地域拠点校における現状 ③高等学校における「通級による指導」についてのQ&A（教員向けリーフレット）について ④令和元年度の成果と課題について ⑤その他

### (6) 通級による指導担当教員の研修体制について

県教育センターや香川大学、市町教育委員会等と連携して通級による指導担当教員等を対象とした研修会を実施し、外部指導者の活用による研修体制の構築及び充実を図るとともに、通級による指導担当教員の専門性について検討を行った（表1）。

表1 通級による指導担当教員の研修体制

研修名	対象者	研修内容	専門性との関連
通級指導教室担当教員協議会	通級による指導担当教員	・グループ協議 ・事例検討〔SSTの指導〕 ・関係機関との連携の講話	・実態把握から指導 ・指導内容・方法 ・在籍学級担任等との連携 ・関係機関との連携
新任通級による指導担当教員研修会	新任通級による指導担当教員	・指導内容（自立活動等） ・教材・教具紹介・作成 ・情報交換	・指導内容・方法（自立活動等）
通級指導公開参観研修	通級による指導担当教員	・指導場面参観 ・参加者との意見交換	・指導内容・方法 ・在籍学級担任等との連携 ・関係機関との連携
特別支援教育・通級指導フォーラム	通級による指導担当教員・全教員（希望者）	・外部講師による講演 ・通級による指導担当教員によるビデオ研修	・実態把握から指導 ・指導内容・方法

## ア. 通級指導教室担当教員協議会

県内すべての通級による指導担当教員を対象とした通級指導教室担当教員協議会を実施した(表2)。毎年実施しているグループ協議において、経験年数の長短が均等になるようにグループ分けを行い、通級による指導の経験年数の長い担当教員がメンターになって助言を行うメンター型の協議を実施している。講師ではなく同じ立場の担当教員から、経験を基に助言を受けることができ、経験年数の短い担当教員の育成につながっている。

表2 通級指導教室担当教員協議会 実施一覧

	日時・場所	研修内容	参加者	参加人数
第1回	令和元年6月4日 県教育センター	①全体協議「通級による指導香川県方針及び研修体制について」 ②グループ協議・情報交換「運営面・指導面での課題と工夫について」 ③講評	通級による指導担当教員 市町教育委員会担当者 教育事務所担当者 外部指導者	53名
第2回	令和元年11月26日 県庁会議室	①県外先進校視察報告 ②講話「社会生活に必要なライフスキルについて」 ③SST実践事例発表	通級による指導担当教員 教育事務所担当者 外部指導者・専門指導員	42名

## イ. 新任通級による指導担当教員研修会

通級による指導担当教員1年目の教員を対象として、通級による指導の基本的な考え方や、「自立活動」の指導に関する知識を習得することを目的とした内容の研修を実施した(表3)。「自立活動の指導目標・指導内容シート」を活用した目標や具体的指導内容の設定の仕方など、基本的なスキルを身に付けることができた。

また、少人数での研修の利点を生かして、指導場面において実際に使用している教材・教具をもとに指導実践の情報交換を行うことや、指導をする上での課題となっている事例を挙げて話し合うなど、具体的・実地的な内容の研修を行うことで、授業力の向上につながった(図1)。



図1 効果のあった教材「農業カルタ」

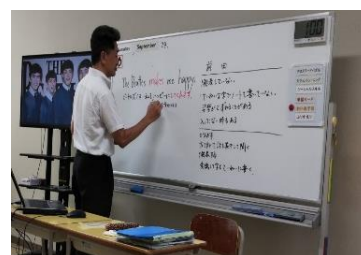
表3 新任通級による指導担当教員研修会(高松市以外)実施一覧

	日時・場所	研修内容	参加者	参加人数
第1回	令和元年5月21日 県教育センター	研究協議「児童生徒の実態を踏まえた指導・支援について」	新任通級による指導担当教員(高松市以外)	2名
第2回	令和元年6月18日 県教育センター	研究協議「児童生徒の実態を踏まえた指導と教材・教具の工夫について」(通級による指導の指導内容・方法(自立活動)について)	新任通級による指導担当教員(高松市以外)	1名

## ウ. 通級指導公開参観研修

6月~11月にかけて通級による指導担当教員がお互いの指導場면을参観し合い、意見交換を行う公開参観研修を実施した。実際に他の教室の指導場면을参観することで、指導方法や

指導内容の実践的なスキルを身に付けることができた。また、授業実施校の特別支援教育コーディネーター、在籍学級担任、管理職も参加することで校内の通級による指導の理解も広がった。さらに、地域のセンター的機能を担う特別支援学校の教員も発達障害に関する知見を深めるために参加し情報共有をすることで地域の相談支援に関する連携を進めた。実施期間が長期に渡っていることから、通級指導教室の運営上の課題に対する、通級による指導担当教員の相談の場としても、有効に利用でき、実践力の向上につながった。



〈通級指導公開参観研修での様子〉

## エ. 特別支援教育・通級指導教室フォーラム

香川大学との連携によるフォーラムを年間2回実施し、外部講師による講演では、発達障害のある児童生徒への学習支援についての講義をしていただくことで、障害理解や通級による指導の実践につながる知見を深めることができた（表4）。また、実践発表ではアセスメントに基づいた適切な指導支援の工夫についてのビデオ研修を行った。授業者が児童への関わり方のポイントを説明しながら、実際の授業の様子をビデオを見せることで実態把握の仕方や、指導目標等の設定についての理解を促すことができた。



〈特別支援教育・通級指導フォーラムでの様子〉

表4 特別支援教育・通級指導教室フォーラム実施一覧

	日時・場所	研修内容	講師	参加人数
第1回	令和元年6月1日 県教育センター	講演 「発達障害のある児童生徒への学習支援について～ワーキングメモリの視点から～」	湯澤 美紀（ノートルダム清心女子大学）	64名
第2回	令和2年1月18日 県庁会議室	実践発表 「学習現場における困難さをサポート」	通級による指導担当教員（小学校）	35名

#### 4. 通級による指導における専門性のポイント

##### 【高等学校】

- 生徒の特性や状況を多面的に捉え、個に応じた指導、支援を行うことができる力
- 校内の相談支援体制を構築する力
- 域内の中学校や相談機関と連携し情報を収集する力

##### 【中学校】

- 生徒の特性や状況を多面的に捉え、個に応じた指導、支援を行うことができる力
- 特別支援教育コーディネーターと協力し校内支援体制を充実させる力
- 保護者や教科担当と連携し情報共有しながら支援を行う力

#### 5. 拠点校における取組概要

##### 【学校種：小豆島町立小豆島中学校】

##### (1) 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方の研究

- ・小豆島中学校では、小豆島町教育委員会から保護者向けに「通級指導教室について」の案内を全生徒に配布し、通級による指導についての理解啓発を行った。通級による指導の対象生徒については、本人や保護者の希望をもとに、校内の特別支援教育推進委員会において通級による指導の必要な生徒を決定した。
- ・対象生徒の実態については、関係職員による「実態把握チェックシート」での気づきやSSWによる心理検査による特性分析、保護者からの聞き取りを行うことで生徒の実態を把握し指導目標を設定した（資料1）。
- ・生徒自身が自分を理解するためにソーシャルチェックシートを使ってチェックを行うことで、自分のよさや改善していくところを見つけることができた。自分のよさを大切にしながら、課題を克服していけるように、学校生活の中で意識して声掛けをした。
- ・評価については、生徒の「振り返りカード」の内容や、通級による指導担当教員、在籍学級担任、特別支援教育コーディネーターによる観察で評価を行った。
- ・来年度の通級による指導を受ける生徒（新1年生）に対しては、事前に保護者と面談し、中学校における通級指導教室の概要、開始について説明すると同時に、目標が達成）できれば通級による指導を終了することを伝えるようにした。

##### (2) 通級による指導の担当教員が通常の学級の在籍学級担任との連携を深化させるための専門性の在り方の研究

- ・1学期、通級による指導の様子を在籍学級担任や保護者と三者で情報共有するために、「連絡ノート」を作成した。
- ・在籍学級担任や保護者からの聞き取りをもとに個別の指導計画を作成し、指導内容については在籍学級担任や特別支援教育コーディネーターと共通理解を図った。
- ・通級による指導担当教員だけでなく、特別支援教育コーディネーターも在籍学級担任との連絡調整や実態把握を行い、校内支援体制の構築を行った。
- ・2学期に通級指導教室の公開授業参観を2回実施した。現職教育として校内の教員も参観することで、通級による指導についての理解を図り、生徒の困難さに対して通級による指導担当教員と在籍学級担任が連携して支援が行えるようにした。

### (3) 発達障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法の研究

#### ・実践事例

#### <対象生徒A 3年 男子>

Aは、小学校の時に広汎性発達障害と診断される。マイナス思考が強く、情緒不安定で学習意欲や態度にムラが見られ、生活リズムが乱れているため学校に遅れたり、体調不良を訴えたりして保健室で休むことも多かった。学習面では、集中できる時間が短く、視覚認知の弱さも見られることから、細かいところの見落としがあったり、書くことに抵抗を感じたりしていた。社会性面では、自分が周囲の人から認められないこと、思うようにいかないことに苛立ちを感じ、周囲の人との考え方の違いに戸惑い、悩むことがあっても、自分から困っていることを表現することは少なかった。

指導については、通級指導教室が自己表現のできる情緒安定の場になるように、話しやすい雰囲気作りに留意した。Aから話をしてきたタイミングを大切に、周囲の出来事や人が考えていることを説明し、選択肢を示しながら、自分で考えて行動できるように助言をした。高等学校の受検や今後の進路、家庭についての悩みを自分から通級による指導担当教員に相談し、話を聞いてもらうことで気持ちが落ち着き、少しずつ前向きに取り組む姿勢が見られるようになった。

学習面では、聞いて記憶するという得意な部分を生かし、書くことよりしっかり話を聞くことを意識させ、授業も、話言葉でのやり取りに重点を置いて進めるようにした。できていることを褒め、頑張りを認めることで、意欲的に学習する場面も少しずつ増えてきた。授業中、机に突っ伏したり、体調不良を訴えて保健室で休んだりすることもなくなり、順調に学校生活を送ることができた。

### (4) 発達障害の状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法の研究

#### ・実践事例

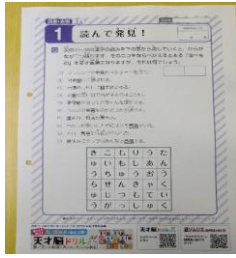
#### <対象生徒B 3年 男子>

Bは、授業中の集中時間が短く、指示の聞き逃しや作業の遅れが見られた。書字に困難が見られ、ノートの字は後で読み返すことが難しく、一斉授業では、聞いていないことが多いため、学習したことが定着していないという実態があった。

Bは在籍学級が英語の学習をする時間を、通級による指導の時間に設定しているため、英語の学習内容を取り扱った指導を行った。指導目標として、人の話を聞いて集中して授業に参加できる時間を増やすこと、書字の苦手さを軽減し、得意なことを生かしながら学習を進めること、既習内容を繰り返し復習することで基礎学力の定着を図った。

授業に見通しをもたせるためにその日の学習の予定を掲示し、1時間の学習内容も細分化することで集中力を持続できるようにした。指導の内容については、WISC-IVの検査結果や日頃の行動観察をもとに、学習の土台となる活動（視覚的な支援を中心）を繰り返し行った。

例 1分間書き取り競争、英単語カード(カルタ、フラッシュカード)、クロスワード(漢字、ことば、文のつながり)、ビジョントレーニング(テングラムパズル、キューブパズル)等



<ビジョントレーニング>



<漢字クロスワード>



<視覚認知（テングラムパズル）>

どの課題にも意欲的に取り組むことができた。苦手とする英単語の学習では、英単語を聞いてカードを取ったり、英単語を見て日本語のカードを取ったりするなどゲーム感覚で英単語を習得していった。教科書の英文の意味を考える際は、書くことの負担を減らすために、日本語訳の穴あきワークシートを使って学習を進めた。「英単語カード」活動で記憶した日本語の意味を当てはめられた時は、覚えられている自分に満足そうな表情をしていた。

【学校種：小豆島中央高等学校】

(1) 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方の研究

○高等学校における通級による指導及び指導内容についての周知の徹底を図る

・ 通級における指導（以下アナザーベーシックと表記する）の概要と指導内容については、全生徒、通級による指導対象生徒、保護者に向けて発信している。新1年生については、入学前オリエンテーションや入学式において口頭で説明し、入学式後のオリエンテーションでは生徒対象のスライドを視聴した。また、全校生徒向けの「教育相談だより」（資料2）や通級による指導対象生徒向けの「ANOTHER BASIC」という通信を発行し、通級による指導の理解を進めた。新1年生の保護者には、「高等学校における通級による指導」（保護者向けリーフレット）を活用し、指導内容や指導までの流れを説明した。PTA総会では全保護者に向けて、生活面での困難さのある生徒への指導や相談支援体制の周知を行い、保護者と生徒が通級による指導についての正しい認識を促した。

「通級による指導」についてのQ&A

Q1 「通級による指導」の対象となる生徒は？

図 1 通常の学級での学習に困難を伴う生徒が、一部、個人の教育ニーズに応じて、特別支援学級（特別支援教室）へ行うことが適当な生徒が対象です。

Q2 「通級による指導」の内容は？

図 2 「通級による指導」では、専攻上実態は通常の学級での学習を目的とする、自立学習型を行います。

自己学習とは、自分の苦手の原因を特定し、自分に合った学習方法や人の助けを借りながら学習に取り組むことです。

【人間関係に苦手がある場合】

- 発声や行動のコントロールの仕方、場に応じたコミュニケーションの仕方などを学習します。
- 状況に応じた声かけ方や、自分の気持ちを伝える方法を学習します。

【自己管理に苦手がある場合】

- 生活リズムを整えたり、社会生活に必要なルールやマナーを身に付けたりするための学習をします。

【読み書きに苦手がある場合】

- 本人に合った読み書きの方法や表現の仕方などを学習します。

<「高等学校における通級による指導」（保護者向けリーフレット）>

令和元年度は、前年度に比べて保護者からの教育相談の依頼が増え、保護者が子供の理解を進める中で「アナザーベーシック」での指導を希望する生徒が増えた。

○対象生徒の目標設定について

・ 通級による指導担当教員、特別支援教育コーディネーター、在籍学級担任、保護者、対象生徒による面談を行い、保護者や対象生徒の願いを聞き取った。実態把握は専門指導員や関係教員による観察、中学校の在籍学級担任からの引継ぎ資料も参考にして、指導目標を設定し、「個別の指導計画」と「個別の教育支援計画」を作成した（資料3）。評価に関しては、学期末に通級による指導担当教員、特別支援教育コーディネーター、在籍学級担任と保護者



との懇談で「アナザーベーシック」での活動状況や活動内容等について報告するとともに、通常の学級や家庭での様子を聞き取り、指導内容の検討を行った。

## (2) 通級による指導の担当教員が通常の学級の在籍学級担任との連携を深化させるための専門性の在り方の研究

- ・ 毎回の「アナザーベーシック」の記録を取り、通級による指導担当教員のコメントをつけ在籍学級担任に回覧し、在籍学級担任からもコメントを記入してもらうことで連携を図っている。
- ・ 特別支援教育や発達障害についての理解を深め、関係機関との連携を図るため、外部講師による研修会を開き、「多様性を認める集団づくり」のための指導の在り方を検討した。
- ・ 対象生徒の在籍学級担任や関係教員と特別支援教育コーディネーター、専門相談員とでケース会を実施し障害特性や指導方法などについての共通理解を図った。
- ・ 平成30年度から「多様性を認める集団づくり」を核に学級づくりやSSTの授業に取り組むことで、教員の生徒理解が進み、「問題のある生徒」という認識から「困難さのある生徒」という捉え方もできるようになった。令和元年度は、特別支援教育コーディネーターや通級による指導担当教員に、困難さのある生徒に対する関わり方の相談が増え、学校全体で特別支援教育の理解が進んだ。

## (3) 発達障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法の研究

### ・ 実践事例

<対象生徒C 3年 男子>

Cは、小学校の時にアスペルガー症候群と診断され、小・中と自閉症・情緒障害学級に在籍していた。感情のコントロールが難しく、他の生徒とトラブルを起こすことや、教員に反抗的な態度を取ることも少なくなかった。また、こだわりがあり、興味の対象が同じ生徒には非常に好意的であるが、それ以外の生徒や人には全く興味を示さないか、否定的であった。また、自分の意見を主張する反面、自分を否定されることに対しては非常に敏感なところがあった。持ち物やスケジュールの管理が苦手で、提出物の期限を守れなかったり、忘れ物をしたりすることが多かった。

指導する上で留意したことは、「アナザーベーシック」では安心して自己表出ができるよう、受容的な声かけや、あたたかい雰囲気作りに努めた。まずは、自己理解を促すため、得意なことや苦手なことを洗い出し、自分を見つめる活動を行った。すると、自分が感情のコントロールや予定や持ち物の管理が苦手で、苦手を改善したいという気持ちがあったため、通級による指導の目標として設定した。自分の気持ちとうまく付き合う方法を知るため、アンガーマネジメントのSSTを行ったり、予定を忘れないようにするためメモを取る練習をしたりした。持ち物の管理では、プリント類を管理しやすくするための整理の方法を通級による指導担当教員と一緒に考え、ファイリングの方法としてまとめ、自分の生活に取り入れた。また、周囲の人に配慮してもらいたいことなどを考え、プリントや持ち物の管理については、周りの生徒や教員に積極的に声をかけてもらったり、メールなどを通じてスケジュールの確認を頼んだりするようになった。提出物は期限までに出せるようになり、出せないときには自ら申告して、対処を教員に尋ねるなど、自分でその時の状況に対応しようとする姿勢を身に付けることができた。

指導の開始当初は周囲に否定的な言動を取ることが気になるCであったが、1年間のアナ

ザーベーシックでの指導を通して、教員の話をも素直に聞き入れることができたり、アナザーベーシックで共に学ぶ生徒の特技を率直に褒めることができるようになったりするなど、情緒が安定し、適切なコミュニケーションを取れるようになった。

#### (4) 発達障害の状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法の研究

○通常の学校におけるSSTの授業の実施について

- ・ 通級による指導の対象生徒には、社会性の課題がある生徒が多い。社会性の課題の改善は対象生徒だけでなく、在籍学級をはじめ、通常の学級の生徒への取り組みも必要である。昨年度より1年の全クラスを対象に、自己肯定感を高めること、多様性を受け入れることを目的とし、双方の自己理解と他者理解を深めるために通常の学級でのSSTの授業を行っている。

LHRの年間計画の中にSSTを位置付け、「互いに尊重できる人間関係づくりを考えよう」の主題で、2時間の授業を実施している（資料4）。生徒の授業後の感想では、「それぞれの個性を大切にし、一人である子を作らないクラスにしたい。」や「一人一人の個性が違うから今の生活が楽しくクラスが成り立っていると感じた。」等、互いを認め、多様性を受け入れる意識が育ってきた。

### 6. 今後の課題と対応

#### (1) 教員が困難さのある生徒への理解を深め、実態に応じた指導内容等を設定すること

通級による指導の対象生徒は、通級による指導の場では自分の事を表現できるが、在籍学級の中では自己表現をしづらい場面も見られる。今後は多様な個性を認め合う学級づくりを充実させ、関係機関とも連携を取りアドバイスを受けながら、特別支援教育の専門性の向上を図っていく。

#### (2) 通級指導教室担当教員の専門性の向上

毎年、通級指導教室の児童生徒数は増加を続けており、地域での切れ目ない支援体制構築の観点から、地域の課題についての取組や地域資源の活用について検討できる、地域単位での研修の実施が望まれる。令和2年度は、通級による指導の公開参観研修に市町の指導主事や、公開参観実施校の教員、地域の関係機関にも参加を促し、通級による指導の理解啓発を図る。

#### (3) 中学校からの支援内容を高等学校でも継続・更新できる支援体制を構築すること

高等学校と中学校の教育目標の違いにより、個別の指導計画に高等学校で必要とされる情報が記載されていない部分があった。今後は社会参加につながる必要な力を洗い出し、指導目標や指導内容について中学校と高等学校で共通理解を図ることで、スムーズな支援の引継ぎをしていきたい。

#### (4) モデル校における授業公開や通級指導教室の実践集の作成・配布による成果の普及

通級による指導のニーズは全日制よりも、定時制や通信制のほうが高い傾向がある。今後は定時制や通信での通級による指導の在り方も検討していく。

## 7. 拠点校について

(中学校)

指定校名：小豆島町立小豆島中学校												
	第1学年				第2学年				第3学年			
	生徒数		学級数		生徒数		学級数		生徒数		学級数	
通常の学級	77		3		94		3		102		3	
特別支援学級	8				3				6			
通級による指導 (対象者数)									6			
	校長	副校長 ・教頭	主幹教諭 指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭	講師	事務職員	特別支援教育 支援員	スクール カウンセ ラー	その他	計
教職員数	1	2	1	26	1	1	5	2	3	2	1	41

※特別支援教育コーディネーターの配置人数：2人

※特別支援学級の対象としている障害種：知的障害、肢体不自由、自閉症・情緒

※通級による指導の対象としている障害種：LD、ADHD、広汎性発達障害

(高等学校)

拠点校名：香川県立小豆島中央高等学校												
課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年				
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数			
全日制	普通科	144	4	173	5	139	5					
定時制	普通科	5	1	5	1	13	1	8	1			
通級による指導 (対象者数)					3							
	校長	副校長 ・教頭	主幹教諭 指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭	講師	事務職員	特別支援教育 支援員	スクール カウンセ ラー	その他	計
教職員数	1	3	1	40	1	0	6	7	0	3	4	65

※特別支援教育コーディネーターの配置人数：1人

※通級による指導の対象としている障害種：広汎性発達障害、ADHD

## 8. 問い合わせ先

組織名：香川県教育委員会

担当部署：香川県教育委員会事務局特別支援教育課